

『漢書』をめぐる読書行為と読者共同体——顔師古注以前を中心に——

柿 沼 陽 平

はじめに

前漢王朝の正史『漢書』は、複数の撰者の手になる重層的な構造を有し、思想的・政治的偏向も含まれ、従来難読の書といわれてきた。すなわち『漢書』は、『史記』や班彪『後伝』等を班固が再編纂したものを母体とし、そこに劉向『別録』・劉歆『七略』を転用した藝文志や、班昭(班固の妹)・馬統(馬融の弟)が統修した可能性の高い八表・天文志等を加えた史籍で(『漢書』叙伝、『後漢書』班彪伝)、儒教主義的要素や政治的偏向が含まれ、史料の厳密さに欠ける面もあるとされる⁽¹⁾。ゆえに『漢書』は、『史記』の内容を再編成し、『後伝』等の諸史料を断代史の名のもとに統合した史籍と評される一方で、『史記』や『後伝』を改作・剽窃した亜流の史書とも評される⁽³⁾。このような理由により、一部の漢代史研究者は従来、『漢書』に含まれるイデオロギーや誤謬を修正し⁽⁴⁾、『漢書』の史料的性格とその成書背景を闡明するのに尽力してきた⁽⁵⁾。だがその反面、『漢書』という書籍自体が中

国史上一体どう読み継がれてきたのかに関しては比較的研究が少ない。唐代以前の漢書学に関しては吉川忠夫氏の詳細な研究が⁶⁾、唐代以後の漢書注に關しては楊守敬氏の輯佚等があるものの⁷⁾、二〇世紀以前の『漢書』諸注を総覧した通史的研究は見当たらない。しかし先行研究をふまえることが歴史学の基本である以上、『漢書』諸注の整理は必須である。また『漢書』注釈史の研究は、『漢書』が各時代にどう読まれてきたのかという読書史研究にも繋がる。それは『漢書』諸注が史実を言い当てているか否かでなく、各時代に『漢書』がどう読まれたのかに着目し、読書行為と社会との関係を探る試みである。その場合、『漢書』の関連書誌情報を整理した上で、『漢書』の「読者共同体（同じような能力・背景・目的に基づく読書習慣を共有する集団⁸⁾）」の時代的变化に注目し、『漢書』諸注の成立背景に目を配る必要がある。

以上の研究目標のもと、筆者は別稿で唐代と清代の漢書学について論じた。それによると唐初の漢書学の集大成とも目される顔師古の注は、それ以前の諸々の注釈を取捨選択した上で作られ、唐代以降の漢書学を決定的に方向づけたものだった。また唐宋時代の印刷技術と科挙制度の確立に伴い、顔注本に基づく進士主導の統一的な読者共同体が一挙に拡大し、それは漢書学の比較的低調な金・元代を経て、明代に再度大きな飛躍を遂げた。このように唐代以降の『漢書』読者共同体が進士主導だった背景には、進士の有する高い学識と社会的名声の存在があり、『漢書』を課題に含む所謂科挙と、「三史」常識」とする士大夫的常識の存在があった。その意味で漢書学と国家支配の関係は密接不可分だった。もっとも、明代漢書学が『漢書』に対する評を中心としたのに対し、清代漢書学は唐代漢書学と同様の考証を重んじ、書院等を介した学者間ネットワークを通じて次々と付注本が刊行された。その成果は王先謙『漢書補注』等に結実し、現在まで学界に影響を与え続けている⁹⁾。

では唐代以前の漢書字は一体どのようなものだったのか。本稿では、唐代以降の漢書字に関する別稿の欠を補い、『漢書』読書史の流れを通史的に把握するため、とくに顔師古（五八一—六四五）注以前の『漢書』注釈史に注目する。そこで本稿では、顔師古以前の漢書字につとに着眼した吉川忠夫論文をふまえ、その驥尾に付し、まず歴代『漢書』注の整理と補遺を行う。そしてそれを一覧表にまとめ（付表参照）、その中で吉川論文を含む先行研究の整理・補遺等をする。その上で、以下本文では唐代以前の漢書字を概観する。

第一節 『漢書』の成立と読者共同体の形成

『漢書』は完成当初から難読といわれた。たとえば『後漢書』列女伝には

この頃、『漢書』は世に知られるようになったばかりで、多くの者はまだそれに通じていなかった。班固の妹の班昭と同じ郡の出身である馬融は、膝を曲げて班昭から『漢書』の読み方を習った。のちにまた詔があり、馬融の兄の馬融が班昭のあとを継いで『漢書』を完成させた⁽¹⁾。

とあり、馬融（後漢を代表する儒家系知識人）でさえも班昭から直接『漢書』の読法の手ほどきを受けた。『漢書』がかくも難読とされた一因は、文中に古字が多く含まれていたからであろう。その一証として、顔師古叙例によれば、唐代以前の「漢書舊本」には「古字」が多かったという⁽²⁾。顔師古は唐代初期に『漢書』に注釈を付した人物、顔師古叙例とは顔師古の注釈書のいわば序文にあたる。

だが一方で『漢書』は後漢初期の成書以来つとに人気を博した史書でもあった。『後漢書』班固伝によると、後

漢末期以前には

当時の人々は非常にこの書を重んじ、学ぶ者でそれを諷誦（＝文を記憶し、それを見ないで音読する意）しない者はなかった⁽¹²⁾。

とある。その理由について大木康氏は、『後漢書』班彪伝論贊や南朝梁・劉勰『文心雕龍』史伝を引用し、唐代以前には『史記』よりも『漢書』の方がよく読まれ、高く評価されていたこと、その原因として、班固の歴史叙述が司馬遷よりも冷静であること、『漢書』の文体が六朝→唐初に重んじられた駢文に似ていることを指摘している⁽¹³⁾。『漢書』の文章が好まれた点は他の史料にもみえ、とくに唐・司馬貞『史記索隱』後序はそれが『漢書』注の増加につながったものべている。

そもそも『史記』の紀事は、軒轅黄帝氏から前漢武帝の代に及ぶ。広く古文・伝記・諸子を集めているが、その間の残欠はおそらく多く、時には異聞を博搜して説明を補っている。だが司馬遷その人は奇を好み、言葉は簡略にすぎる。故事そのものは明瞭であるが、文章は曖昧である。ゆえに後学にはなお究明できないところが多い。一方、班氏の『漢書』は後漢時代につくられた。班彪は司馬遷の後を継いで歴史を撰述した。その文章の流れがより明瞭である理由は、それが多くの賢人「の言説」をあわせとったもので、羣理（諸々の理）が備わっているからである。だからその「旨」はゆたかで、最近（唐代）の儒者達はみな『漢書』の「詞文」を仰ぎ学んでいる。その「訓詁」にもおそらく多くの流派がある。蔡謨集解が書かれた時にはすでに二四家の説があった。ゆえに『漢書』は、「今では」文章上とどこおりなく、理の上でも明瞭でない点がないのである。……されば古来、『史記』に「注釈を付す者はきわめて少なく、音義もまた少ないのである⁽¹⁴⁾。

これよると『漢書』の内容・表現は『史記』よりも豊かで、ゆえに『漢書』には漢・唐の間に多くの注釈が付された。これは現代的な観点からみると一見矛盾する。なぜなら注釈とは普通一読しただけではわからない内容に付され、その理解を助けるのを目的とするからである。にもかかわらず魏晉南北朝時代に逆の現象が起こった理由は、司馬貞によれば、『漢書』の内容・表現の方が明瞭で、賢人の言説を多く含み、「羣理（諸々の理）」が備わっていたためである。すると『漢書』は、古字を含む点で難解とみなされはしたもの、その内容・文章・理（因果関係の意か）は豊かで、それゆえ後漢時代以来読者と付注者を惹きつけてやまない魅力的な漢籍だったといえよう。

その後、『漢書』はさらに多くの読者を獲得していった。その理由は以上のごとく班固の歴史叙述が冷静で、その内容・文章・理が豊かだったことに加えて、少なくとも以下の三点にも求められる。

(A) 『漢書』は皇帝の認可を得た史書で、その後も詔を受けた馬続らが続修し、官撰としての公的価値を高めていった。

(B) 『漢書』は刑政（刑罰、政治）等の現実問題や、軍謀智略に関する参考書として有用とみなされた（吉川論文参照）。

(C) 後漢末に応劭や服虔の訓詁学的注釈が『漢書』に付され（付表参照）、徐々に理解が容易になった。後漢末の大儒応劭らが付注したことで、『漢書』の信頼度・名声はさらに高まったことであろう。

こうして『漢書』は、後漢末のころより『史記』・『東觀漢記』とともに「三史」と称され、三国時代には『東觀漢記』以上の名著とさえいわれるようになった。その一証として『三国志』呉書韋曜伝には

昔、班固が『漢書』を作った。その言葉遣いは典雅だった。のちに劉珍・劉毅らが『漢記』（『東觀漢記』）を作ったが、遠く班固に及ばず、叙伝の部分はもつとも劣っていた⁽¹⁵⁾とある。

吉川氏によると、このころから『漢書』は、「師法」の継承という形をとって学ばれるようになった。それは弟子達が師匠のもとに参集して一同に学習し、代々学統を受け継いでゆくという方法である。各々の「師匠」は各々の学説に基づく『漢書』の読み方を行ない、弟子達はそれを代々継承した。これは当然学派の形成に繋がり、時に学派間の対立関係も醸成した。このような「師法」の継承による学問の仕方は、一般に儒家經典の学習時に採られる学習方法で、外典の学習時には本来あまりみられない。吉川氏によれば、かかる師法が漢書学に適用された事実は、『漢書』が三国時代にすでに経書とならぶ地位を獲得していたことを物語る。なるほど、『三国志』呉書薛瑩伝には

漢代の司馬遷・班固はみな畢生の才能で、彼らの著わした書籍は精妙であり、六経とともに伝えられた⁽¹⁶⁾とあり、三国時代に『漢書』はすでに六経（詩・書・礼・楽・易・春秋）とならぶ儒家系知識人の古典だった。

ちなみに吉川氏は、『漢書』がこのように六経とならぶ古典とされ、その読み方が師伝された点に、『漢書』注がその後徐々に増加していった二因を求めている。ただし『史記』も、後漢時代以降『漢書』と同様に「師傳」され、内容的にも『漢書』と一部重複し、『漢書』とともに「三史」と併称されたが、『史記』に対する注は当時あまり付されなかった（前掲『史記索隱』後序）。本節でのべたさまざまな理由により、後漢時代以降、人々は『史記』よりも『漢書』の方に注釈を付けるべきだと考えていたのである。

第二節 三国時代の漢書学

後漢の最末期になると、『漢書』に対する注釈の量はにわか増加した。その大半は、応劭・服虔らによる「音」や「音義」だった。これらは『漢書』の語句に対する簡略な説明や、漢字の発音の仕方をしめしたものである。漢字の発音の仕方がしめされた理由は二つある。第一に、漢文では一つの漢字に複数の音がある場合があり、音の違いに応じて意味も異なる場合がある。それゆえ文中の漢字の音をしめすことで、その漢字の意味を特定・明示する必要があった。第二に、前掲『後漢書』班固伝に「当時の人々は非常にこの書を重んじ、学ぶ者でそれを諷誦しない者はなかった」とあるごとく、後漢時代の人々は『漢書』を「諷誦（＝音読）」するのが常だった。つまり『漢書』の読者は一般に黙読でなく音読し、ゆえに『漢書』の正統な発音の仕方を学ぶ必要があった。

こうして『漢書』はおもに音読を通じて学ばれた。もともと、後漢中期頃までの学問の中心だった国立の儒学学校兼官吏養成場の太学で、太学生達が授業の一環として『漢書』を学んだという史料はない。太学で教授職を担った「博士」の中にも、著名な漢書学者はほとんどいない（延篤のみ漢書注を付した可能性がある。付表参照）。漢書学の大家服虔は若いとき太学に入っているが、彼の注釈は晩年の作と思われる（付表）、やはり太学での教育に『漢書』を用いたとの証拠はない。しかも後漢後期になると太学は衰退した。二世紀中葉の太学生の人数は三万人に達したものの、実態は

博士は席により講義せず、「朋徒（学生達）」はたがいに眺めあつて、怠けおこっていた⁽¹⁷⁾。

という有様で、博士の講義を受ける場でなく、朋徒間の交流の場に成り下がっていた。その反面、一部の大学生は混乱を極める中原から離れ、地方へと分散し、いわゆる私学を生んだ。陳寅恪氏によると、こうして学問の中心地は後漢末に太学から地方豪族世界へと移っていった⁽¹⁸⁾。後漢末に『漢書』に注を付した服虔や応劭は各々九江太守・泰山太守で、ともに私学の人材である。『漢書』を学ぶ者は彼らのもとで『漢書』の音説に励んだのである。要するに、このころ各地には『漢書』の読者共同体が並存し、その牽引者は太学でなく私学だったのである。

このとき私学を担ったのは、渡邊義浩氏によると、地方豪族の支持を得た「名士」達だった。「名士」とは、郷里社会の「民の望（一般民衆の支持）」や皇帝権力の支えによらず、「名士」間の人物評価によって台頭する存在である。その際の人物評価の基準は儒学・文学・玄学・史学・道教・仏教等の精通度にある。中でも儒学は「名士」が有すべき必要最低限の教養だった。ゆえに「名士」が地位を高めるには、儒学に加えて他の諸学にも精通すること、他の「名士」との差異化を図る必要があったという⁽¹⁹⁾。「名士」の後漢末〜三国時代における位置づけ、貴族との関係等に関する渡邊説には異論も多いが、当時の知識人の多くが儒学を基礎とし、他の学問にも注意を払っていた点はつとに先学の指摘がある。中でも六朝士大夫がとくに玄学・儒学・文学・史学の兼習を理想視した点は森三樹三郎氏の研究に詳しく⁽²⁰⁾、吉川氏の研究はその傾向が後漢末に遡ることをしめしている⁽²¹⁾。かかる傾向は、後漢末以来の学校で儒家經典以外の学問（『漢書』を含む）の学習者が増加していったことを物語る。ただし後漢末の太学は党錮の禁等で混乱を極めていた。ゆえに後漢末の漢書学は、太学で成長するはずもなく、地方の各私学でとくに成長したのであろう。

その後、既述のごとく、士大夫が玄学・儒学・文学・史学の兼習を理想視する傾向は益々強化されたといわれる。

そこで実際に『三国志』等を見ると、たしかに魏晉時代に漢書学者の数は激増している。また、そもそも後漢時代の人にとって、『漢書』は前漢王朝一代の歴史書で、漢王朝の正統性をしめす重要な官撰の書だった。本稿文末注一でのべたように、『漢書』が前漢王朝の神秘化・神聖化をどれほど意図したものかには議論もあるが、少なくとも漢代の人々がその内容を正面から改訂・批難（つまり「国史の改作」）することは容易でなかったろう。これを受けて、三国時代においても、一部の地域では『漢書』はなお強い政治性を帯びた史書だった。なぜなら一部の人々は後漢末～三国時代に「漢室復興」をスローガンとしたため、『漢書』は彼らにとってなお政治的に重要だったからである。このことも、後漢末～三国時代における漢書学者の増加に寄与したと思われる。

たとえば後漢末の漢書学者のうち、李奇・劉展（鄧展）・文穎はみな南陽出身で、当時南陽は劉表が治めていた。既述のごとく、後漢末の学問の中心は徐々に私学へ移り、唐長孺氏によればその中でもとくに栄えたのが劉表のサロンだった⁽²⁾。劉表のもとで多くの漢書注が著わされた理由は、学術支援で有名な劉表が後漢の帝室の一員でもあり、『漢書』を漢帝国の正史として重視したためであろう。また劉備は拳兵以来「漢室復興」を掲げ、のちに漢王朝を継ぐ蜀漢を建国した。ゆえに蜀漢にとっても『漢書』は自らの祖先に関する重要な史書だったと思われる。かりに「漢室復興」をスローガンとする劉備以下の人々が漢代史に無知では嗤われよう。現に、劉備とともに「漢室復興」を目指した諸葛亮は『論前漢事』・『漢書音』を著わし、『漢書』に熟達していた。また劉備自身、臨終に際して太子劉禪に、『史記』や『三史』でなく、あくまでも『漢書』の熟読を薦めた。

『諸葛亮集』は先主劉備の遺詔を載せる。劉備は後主劉禪に勅を下してこういった。「……『漢書』・『礼記』を読むがよい。時間があれば諸子百家と『六韜』・『商君書』も閲覧し、知見を増やすようにせよ。聞くところ

ろによれば、丞相諸葛亮はおぬしたちのために『申子』・『韓非子』・『管子』・『六韜』を一部ずつ書写し終わったものの、まだ発送しないうちに紛失してしまったとのこと。おぬしは改めて自分でそれらを求めて習熟するように……」(『三国志』蜀書先主伝注引『諸葛亮集』⁽²³⁾)。

劉備が『史記』でなく『漢書』を薦めた一因は、『漢書』が実用性に富む史書(いわゆる刑政の書)だったのに加え、それが蜀漢前史の一部(漢王朝の前半部分の史書)でもあったからではないか。

これに対して曹魏の場合、初代皇帝の文帝曹丕は後漢最後の献帝より帝位を禅譲され、いわば後漢を滅ぼした張本人である。よって曹魏にとっては、『漢書』は過去の一王朝の史書にすぎず、それを魏の皇帝自らが士大夫との関係維持のために積極的に学ぶ必要は蜀漢ほど高くなかつたろう。もともと、曹魏の君主曹丕も『漢書』を読破した。

わたくしはそこで若いころに『詩』・『論』を音読し、成長してからは五経(易・書・詩・礼・春秋)・四部(経学・諸子・史学・詩文)を読み、『史記』・『漢書』・諸子百家の書物で読まないものはなかった(『三国志』魏書文帝紀裴松之注引『典論』⁽²⁴⁾)。

だがこれも曹丕が曹魏の正統性に関する理論武装をするために『漢書』を読んだという意味ではない。『三国志』魏書文帝紀裴松之注所引の曹丕『典論』自序に明記されているごとく、むしろそれは、学問好きの父親曹操にならって曹丕もあらゆる書籍を読破したという自慢話の一節で、曹丕が読破したのは『漢書』に限らない。また曹魏には多くの漢書学者がいたが、それも正確には後漢末期の人材を受けついでにすぎないであろう。中には張揖や蘇林のように、太和年間(明帝初期)や黄初年間(曹丕期)に「博士」となった漢書付注者もいたが、これも

張揖・蘇林の注が博士着任後に作られたことを意味せず、彼らが太学で『漢書』を講義したとも限らない。つまり曹魏が国策としてどの程度『漢書』の講読を重視したのかには疑問が残る。

また孫呉の場合、蜀漢や曹魏とは異なり、そもそも正統性の所在が曖昧だった⁽²⁵⁾。だが孫呉も曹魏同様に、漢王朝を賛美する必然性をもたない。なぜなら孫呉は後漢皇帝の血縁者（蜀漢）でも、被禪讓者（曹魏）でもないからである。初期孫呉を代表する『漢書』師法伝授者の張昭は「漢室復興」を志向したが、それはあくまでも孫権の皇帝即位前のことである。また漢書注で有名な韋昭は博士祭酒だが、漢書注成立は孫権期に遡る一方⁽²⁶⁾、韋昭の博士祭酒着任は孫休期のことである。よって韋昭も博士着任期に国策の一環として漢書注を撰したとは考えにくい。また彼には『国語解』等の著名な書もあり、漢書注の業績だけで博士祭酒に選ばれたわけでもあるまい。ただし孫呉でも士大夫間での『漢書』の学習は依然別の理由（後述）で重視され続けた。

では蜀漢のみならず、曹魏や孫呉でも『漢書』の学習が重視され続けたのはなぜか。『漢書』が成立以来人気を博した理由についてはすでに前節で検討したとおりであるが、中でも三国時代の理由としてとくに注目すべきは、『漢書』の内容・表現・理が豊かであったことに加え、吉川氏も指摘するように、『漢書』が刑政（刑罰、政治）等の現実問題や、軍謀智略に関する参考書としても有用だった点である。曹魏や孫呉で『漢書』が重視された主因はここに求められよう。実際に、吉川氏も紹介するとおり、曹魏では夏侯淵が戦争ごっこを好む子の夏侯称に「項羽傳（『漢書』項羽伝。『史記』は項羽本紀）」と「兵書」の読解を薦めている⁽²⁷⁾。また孫権は將軍の呂蒙や蔣欽に向かつて、政治に関する有益な書籍として「三史」や兵書の講読を薦めた⁽²⁸⁾。留賛も三史・兵書を読んで古の將達に心を馳せた⁽²⁹⁾。さらに孫権は、配下の張昭が『漢書』の「師法」に習熟していると聞き、張昭の子の張休を通じ

て、それを太子孫登に学ばせた⁽³⁰⁾。このときも孫権は、孫登が『漢書』を通じて「近代の事」に習熟することを期待している。なお蜀漢でも、『漢書』は正統な史書として重視されたのみならず、刑政等の現実問題や軍謀智略に関する参考書としても重視された。このことは、他人に『漢書』を読ませてその内容を学習した文盲の蜀将王平の故事からも窺える⁽³¹⁾。

第三節 晉・南北朝時代の漢書学

一、『漢書』の学習者と学習目的

曹魏・孫呉・蜀漢が滅亡すると、「漢室復興」という大義名分はほぼ完全に失われた。五胡十六国の一角を占めた劉淵や、ほぼ同時期の蜀漢の李寿は漢を国号としたが、それ以降「漢室復興」のスローガンは士大夫間での求心力を失ったごとくである。だが『漢書』はなおも読まれ続けた。付表をみると、『漢書』の注釈は晉代以降もその数を増している。数量的に三国時代には及ばぬものの、晉灼・臣瓚・蔡謨の注はみな著名かつ大部である。

かかる漢書学の進展を後押ししたのは、必ずしも当時の国立教育機関（太学や国子学等）ではなかった。そもそも既述のごとく、太学は後漢末期以降、人物評価の場と化し、史学どころか儒学さえ十分に展開できない状態だった。その後、福原啓郎氏によると、元康三年（二九三年）に国子学が完成し、国子祭酒・国子博士・国子助教を擁し、皇帝に対する應對・顧問、国子生の育成、祭祀や儀礼を管理する尚書祠・儀両曹等の部局からの質疑に対する回答を司った⁽³²⁾。だがその中にもめぼしい漢書学者は見当たらない。もともと、南北朝時代になると、太学・

国子学の並立状態に加えて、とくに南朝では劉宋文帝元嘉十五年（四三八年）に儒学館、元嘉十六年に玄学館・史学館・文学館、明帝泰始六年（四七〇年）に総明館が建てられ、南朝斉武帝永明三年（四八五年）まで継続した。さらに『梁書』任昉伝姚察論には

かの前漢・後漢時代における賢人を登用する方法をみてみると、だいたい儒学の経術をまず評価基準とした。最近では人材を登用する際に多く文史を基準としている⁽³³⁾。

とあり、南朝梁時代には文史（文学・史学）は官吏登用基準ともされた。当時「史学」といえば「三史」や「史漢」のことで、『漢書』も含まれる。また『陳書』沈洙伝に

梁の大同年間（五三五～五四五）になると、学者の多くは文史を涉獵し、「儒家經典に対して」章句を付けることはしなかった⁽³⁴⁾。

とあり、北朝でも「史学（『漢書』を含む）」の重視はすすんだ。だがそれにもかかわらず、南北朝期の太学・国子学の教官（祭酒・博士・助教等）からは、結局著名な漢書学者が一人も出現しなかった。国子学関係者の『漢書』注の出現は隋代まで待たねばならない。では晉・南北朝期の教官は一体どのような人々だったのかといえば、これにはつとに吉川忠夫氏や森三樹三郎氏の研究がある。それによると「博士」連中が専門とする経学は当時の士大夫にとって常識であり、学んでいて当たり前の学問だった。ゆえにそれだけを学ぶ「博士」は逆に軽んじられることがあった。そして彼らには儒学以外の史学などの素養が概して欠けていたようである。たとえば趙郡の李瑒は史学に通じ、弟の李郁に

士大夫の学問とは、広く古今のことを考察してやむものである。専門的経学によって老博士となる必要なん

ぞあるまい⁽³⁵⁾。

と戒めており、「老博士」の史的素養のなさが前提とされている。議曹の魏収が「諸博士」との討論中に『漢書』を引用した時も、博士達に

『漢書』が經学の術を立証するなどということは聞いたことがない。

と馬鹿にされ、のちに博士達は自らの無知を謝罪している⁽³⁶⁾。これらの例は、經学専門の「博士」達が必ずしも漢書学の推進役ではなかったことを裏書する。

では『漢書』はなぜかくも重視され続けたのか。晋代以後に「漢室復興」のスローガンが力を失った以上、『漢書』は自王朝史としてではなく、むしろ別の用途をもつ書籍として重視されたとみられる。そこで第一に注目すべきが、既述のごとく『漢書』の内容・文章・理が豊かで、しかも応劭らの付注を経て一定の名声も有していた点である。第二に注目すべきは、『漢書』の刑政書としての機能である。この点は吉川論文に詳しいので贅言しない。第三に注目すべきは、晋代以降の特徴として、とくに『漢書』が士大夫間での名声を高める道具として重視され始めた点である。たとえば『世説新語』言語篇に

名士たちが一緒に洛水のほとりに遊びにいった。帰宅するや、楽令は王夷甫(王衍)に「今日の遊びは楽しかったかね」とたずねた。王は、「斐僕射(斐頴)はたくみに名理について議論し、混混^{こんこん}として水がわき出るように、尽くせぬ妙味があった。張茂先(張華)は『史記』と『漢書』について論じ、靡靡^{ひひ}として耳を傾けるに値するものだった。わたくしと王安豊(王戎)とは延陵(春秋呉の賢人季札)・子房(漢初の張良)に關して

議論をしたが、それも超超^{ちやうちやう}として深い趣きがあったよ」と答えた⁽³⁷⁾。

とあり、張華は名士（＝士大夫の意）たちとの宴会で『史記』と『漢書』について滔々と説明し、名声を高めている。また史書の執筆は不朽の事業とされ⁽³⁸⁾、『漢書』注は執筆者の名譽を伝える格好の手段だったと思われる。

それでは以上の諸理由のどれかに基づいて新たに『漢書』を学習しようとした者がいた場合、その者はどのような方途によって『漢書』を学習することができたのであろうか。そこで改めて晉・南北朝期における『漢書』学習者の状況を一瞥すると、その底辺には、文盲等の理由で『漢書』を読めない者達がいた。たとえば石勒は文盲で、他の人に『漢書』を読ませてその内容を学んだ⁽³⁹⁾。これに対して文字が読める者の一部は、『漢書』を独学で勉強した。たとえば陸倕は、あるとき人から『漢書』を借りたものの、五行志四卷を紛失してしまった。そこで暗記で筆写して返却し、ほぼ遺漏はなかったという⁽⁴⁰⁾。この他に上位の士大夫ともなれば、吉川氏が挙例しており、特定の私学や個人から『漢書』の講義を受ける例も散見する。このときの『漢書』の講義の形式は三国時代同様、師弟間の「師法」の伝授という形を取った。

二・漢書学と六朝士大夫社会

以上の『漢書』学習法のうち、どれを採用しても、ある程度名を挙げることはできたようである。すなわち、『漢書』は経書と同様に重視されたとはいえ、必ずしも経学と同様の扱いを受けたわけではなかった。儒学は士大夫の文化価値の基礎をなし、有して当然の文化価値だった。ゆえに経学しか学ばない経学専門家は逆に軽んじられることもあった。だが『漢書』を学ぶ者の数はその経学専門家の数よりも少なかった。よって『漢書』の学習は士大夫社会での自己顕示に役立ったと考えられる。とくに南朝梁末期には戦乱で知識人が減少し、『論語』・『孝

『経』を読める者さえ「師」とよばれたため⁽⁴¹⁾、『漢書』も読めることは大きな利点となつたろう。しかも井上進氏によると、当時所謂本屋は存在せず、書物の増刷も「庸書（人を雇って書写させること）」や自写に依存していた⁽⁴²⁾。となれば、『漢書』という書籍を所有すること自体、所有者の名声を高めることに繋がったはずである。現に、謝僑の一家が貧乏で食事に事欠いた際に、謝僑は『漢書』を質に入れようとした子の謝啓の案を突っぱねた⁽⁴³⁾。つまり『漢書』はそれ自体が没落貴族を一時的に救い得るほど高価だった。また臧逢世は二十余歳のときに『漢書』を読もうとしたが、長らく貸し手がみつからず、ようやく姉の夫（劉緩）の食客から『漢書』を借りることができた。かくて臧逢世は紙の切れ端に『漢書』を書写して勉強し、名声を高めた⁽⁴⁴⁾。「書物を貸すのも返すのも、どちらも阿呆だ（唐・段成式『酉陽雜俎』続集卷四⁽⁴⁵⁾）」の一文が象徴することく、唐代以前は写本の時代で、書籍はどれも大変高価で貸し借りさえ困難であり、『漢書』も稀覯本だった。よって晉・南北朝の人々は、『漢書』（の一部）を所有し、その概略を知っておくだけでも、十分に士大夫社会内で自己顕示しえたと思われる。

ただし専門の漢書学者として名声を高めるには、むろんさらなる努力を要する。たとえば『隋書』経籍志史部正史類には

『史記』・『漢書』のみは師法によつて伝承され、みな注釈が存在する。『三国志』と范曄『後漢書』には音注もあるが、最近の書籍なので読めばわかる⁽⁴⁶⁾。

とあり、『三国志』・『後漢書』は隋唐人にも読める書籍だったという。これは裏を返せば、隋唐時代に『漢書』がすでに読みにくい表現を含む古典とみなされていたことをしめす。著名な漢書学者ともなれば、当然それらの箇所に関する自説を開陳し、弟子達の前で『漢書』をスラスラと読んでみせねばならなかったであろう。加えて晉

灼は、漢代の異聞収集を行い、旧注を批判した。同様の異聞収集の例は南朝に集中し、吉川氏は「江南の『漢書』注が異聞を集めることをひとつの特色としていた（三二八頁）」とする。また臣瓚は、当時出土した汲冢竹書を用いて『漢書』を批判した。その補欠（別書で史書の記事を補完）・備異（異聞収集）・懲妄（別書に基づき史書を訂正）・論弁（史実と史書への論評）によって史書を解釈する試みは、当時の史学全体の動向とも合致する。関連諸説を総括した渡邊義浩氏によれば、後漢末に「名士」層を構成する人物評価の可視的基準として、新たに人物志や別伝が作られるようになった。史家は異聞収集を行い、正史の史料批判が可能となった。結果、『三国志』裴松之注の成立（四二九年）前後に、儒学的訓詁学に範をとった音義・訓詁でなく、上記の補欠・備異・懲妄・論弁を軸とした史料批判に基づく新しい「史学」が誕生したという⁽⁴⁷⁾。かかる動向は、晋灼・臣瓚以降の『漢書』注の状況とも符合する。

こうして『漢書』所有者や漢書学者は増加していった（付表参照）。それは『漢書』の読者の無秩序な拡大でなく、「師法」の相伝に基づく『漢書』の読者共同体の林立・拡大を意味した。その中で士大夫達は徐々に、『漢書』を所有・読解するだけでは他者との差異化が十分にできなくなり、著名な「師法」の習得を目指すようになっていった。その一例として『旧唐書』儒学伝上・秦景通伝に

秦景通は常州晉陵の人である。弟の秦暉とともにとくに『漢書』に詳しく、当時『漢書』を習う者はみな秦景通・秦暉を宗師と仰いだ。一般に秦景通を大秦君、秦暉を小秦君とよぶ。もし秦兄弟の指導を受けていなければ、「師匠の指導を経ておらず、取るに足りない」といわれた。秦景通は貞観中に太子洗馬となり、崇賢館の学士を兼任し、漢書学者となった。このほかに劉納言があり、彼も当時の宗匠だった⁽⁴⁸⁾。

とある。また漢書学者の中には排他的な権威も登場し、先代が『漢書』に理由不明の校訂を加えた場合であつてもその校訂を妥当とみなし、時の皇帝（梁の元帝）すらそれを黙認する事態が発生した⁽⁴⁹⁾。漢書学者の中には相互交流もあつたものの（たとえば顔氏と沛国劉氏。吉川論文参照）、学説上の齟齬が完全に解消することはなかった。このように権威ある「師法」の伝授者は「宗匠」・「師匠」とよばれ、代表格として梁の劉顯・韋稜、陳の姚察、隋の包愷・蕭該がいた⁽⁵⁰⁾。また『漢書』に「注解」を付した者の数は後漢末～陳代に「二十五家」に及んだとも⁽⁵¹⁾、東晋・蔡謨『漢書集解』成立前に存在した『漢書』の「訓詁」は「二十四家」に及んだともいわれる⁽⁵²⁾。ここでいう「二十五家」・「二十四家」が流派数・学者数のどちらなのか、「注解」と「訓詁」が同義なのか否か、それとも注釈の意なのか否かは判然としないが、これは南北朝時代に『漢書』の読者共同体が複数並存していたことを物語る。付表をみるかぎり、少なくとも『漢書』の付注者の実数は二四や二五をはるかに越えるものだったと考えられる⁽⁵¹⁾。しかも隋代になると、漢書学はさらなる進展をみせた。これは、王光照氏も指摘するように、隋が南朝陳に對抗して自国を前漢以来の正統王朝と捉え、『漢書』を重視したことに起因する⁽⁵³⁾。かかる隋代漢書学の隆盛は、隋代に著わされた漢書注の数からも窺える。しかも漢書学の中心が私学だった南北朝時代とは異なり、隋を代表する漢書学者の蕭該は国子博士、包愷は国子助教である。これは漢書学の中心が徐々に官学に移ったことを示唆する（ただし当時の国子学には肝心の学生数が少なく、あくまでも萌芽的段階だったと思われる）。こうして漢書学は持続的な発展を遂げ、唐代初期にはついに顔師古（五八一～六四五）の漢書注が登場するのである。

おわりに

以上の検討によれば、『漢書』はもともと、古字を含む点で難解であったが、その内容・文章・理は豊かで、典雅な文辞を兼ね備え、後漢以来読者と注釈者を惹きつけてやまない漢籍だった。しかも『漢書』は第一に、皇帝の認可を得た史書で、詔を受けた馬続らが続修し、官撰としての高い公的価値を有した。第二に、刑政（刑罰、政治）等の現実問題や、軍謀智略に関する参考書として有用とみなされた。第三に、後漢末に応劾や服虔の訓詁学的注釈が『漢書』に付され、一定の権威を帯び、徐々に理解が容易になった。こうして『漢書』は徐々に読者を獲得していった。このとき読者個人は必ずしも『漢書』を好き勝手に解釈し、文字を校訂し、たんに趣味の一環として『漢書』を読んだわけではなく、むしろ士大夫の多くは特定の「師匠」について『漢書』を学んだ。かかる漢書学の伝統は、首都の太学や国子学等でなく、おもに地方の私学で成長した。このとき後漢時代の官吏や三国時代に「漢室復興」を掲げた人にとっては、漢王朝の正史『漢書』は帝王の記録としての絶対性を持ち、その意味でも『漢書』は必読文献だったと思われる。それ以外の者にとっても、『漢書』はなお刑政書として有用視された。その後、魏晋南北朝時代に士大夫が儒学のみならず玄学・文学・史学の兼習をも理想視するにつれ、『漢書』は士大夫社会内で士大夫が自己顕示するための道具ともみなされるようになっていった。もともと、『漢書』自体は当時きわめて高価で、所有するだけでも意味をもった。また文盲の人にとっては、その内容を知るだけでも有意義だったようである。だが高位の士大夫にとっては、『漢書』はやはり「師法」に基づいて読むべきもので、

各々の「師法」には相異もあった。かくて後漢末く隋代には『漢書』の読者共同体が各地に並存・分散した。当時の読者共同体はまだ明清知識人達ほどの全国的な相互ネットワークを形成しておらず、各師法は独立的で、情報偏差も大きかった。たとえば管灼注は南方にしっかりと伝播せず、漢書学の南北分化の端緒となった(付表)。吉川氏は「奇をてらい、他人の意表をつき、知識をひけらかす南朝学者の個人的性格」があったとするが、そのさらなる背後には、そのように自己顕示せざるをえない士大夫社会の潮流があった。その学問的手法は補欠・備異・懲妄・論弁を主とする新しい「史学」とも即応する。かくて「二十五家」とも「二十四家」ともいわれる『漢書』の注解・訓詁が生まれた(付表によると注釈書の数はそれ以上)。そして隋代になると、南朝陳に対抗して隋を前漢以来の正統王朝と捉える国策によって『漢書』はより重視され、国子学が漢書学の拠点のひとつとなった。以上が本稿の概略である。それが唐代以降の漢書学といかに異なるかは、その内容を前稿と比較していただきたいと思う。

- (1) 板野長八「班固の漢王朝神話」(『儒教成立史の研究』岩波書店、一九九五年)は『漢書』を、漢堯徳説(劉氏と漢朝を聖王堯の後継とする説)と漢火徳説(漢朝を堯と同じ火徳とする説)に基づいて漢朝を神聖王朝として描いた史書とする。だが小林春樹氏は「漢書」帝紀の著述目的―「高帝紀」から「元帝紀」を中心として―(『東洋研究』第一七六号、二〇一〇年)等の論文でこの説を批判し、『漢書』で高祖以外の皇帝が聖王と捉えられていない点を指摘し、『漢書』の編纂意図は漢を「神聖王朝」でなく「正統的・必然的王朝」として捉えることにあったとする。

- (2) 『後伝』については、福井重雅「班彪『後伝』の研究——『漢書』編纂前史——」（『陸賈「新語」の研究』汲古書院、二〇〇二年）等。
- (3) 曾小霞「近三〇年『史記』・『漢書』比較研究綜述」（『陝西教育学院字報』第二五卷第一期、二〇〇九年）等。
- (4) 福井重雅『漢代儒教の史的研究』（汲古書院、二〇〇五年）等。
- (5) 岡崎文夫「漢書食貨志上について」（『支那学』第三卷第一号、一九二二年）、稲葉一郎『中国の歴史思想』（創文社、一九九九年）等。
- (6) 吉川忠夫「顔師古の『漢書』注」（『六朝精神史研究』同朋舎、一九八四年）。以下、吉川説は特記のない限り本論文をさす。
- (7) 楊守敬「漢書古注輯存序」（『楊守敬集』第五冊、湖北人民出版社、一九九七年版）、閻平凡「唐前《漢書》旧注輯佚与研究述評」（『中国史研究動態』二〇〇七年第七期）。
- (8) Chartier, Roger. 1992. *L'ordre des livres: lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIVe et XVIIIe siècle*. Aix-en-Provence: Alinéa.
- (9) 拙稿「『漢書』をめぐる読書行為と読者共同体——顔師古注以後を中心に——」（榎本淳一編『古代中国・日本における学術と支配』同成社、二〇一三年、七五〜一〇一頁）。
- (10) 時「漢書」始出、多未能通者、同郡馬融伏於閣下、從昭受讀、後又詔融兄續繼昭成之（『後漢書』列女伝）。
- (11) 『漢書』舊文多有古字。
- (12) 當世甚重其書、學者莫不諷誦焉（『後漢書』班固伝）。
- (13) 大木康「『史記』と『漢書』の読書史」（『『史記』と『漢書』——中国文化のパロメーター——岩波書店、二〇〇八年）。

- (14) 夫太史公紀事、上始軒轅、下訖天漢、雖博采古文及傳記諸子、其間殘闕蓋多、或旁搜異聞以成其說、然其人好奇而詞省、故事覈而文微、是以後之學者多所未究。其班氏之書、成於後漢。彪既後遷而述、所以條流更明、是兼采衆賢、羣理畢備、故其旨富、其詞文、是以近代諸儒共行鑽仰。其訓詁蓋亦多門、蔡謨集解之時已有二十四家之說、所以於文無所滯、於理無所遺。……然古今爲注解者絕省、音義亦希（唐・司馬貞『史記索隱』後序）。
- (15) 昔班固作『漢書』、文辭典雅。後劉珍・劉毅等作『漢記』、遠不及固、敘傳尤劣（『三國志』吳書韋曜伝）。
- (16) 漢時司馬遷・班固咸命世大才、所撰精妙、與六經俱傳（『三國志』吳書薛登伝）。
- (17) 博士依席不講、朋徒相視意散（『後漢書』儒林列伝上）。
- (18) 陳寅恪『唐代政治史述論稿』中篇（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一年版）等。私学については吉川忠夫「鄭玄の家塾」（『中国貴族制社会の研究』京都大学人文科学研究所、一九八七年）等も参照。
- (19) 渡邊義浩『三國政權の構造と「名士」』（汲古書院、二〇〇四年）。
- (20) 森三樹三郎「六朝士大夫の精神」（同朋舎、一九八六年）。
- (21) 吉川忠夫「六朝士大夫の精神生活」（『六朝精神史研究』同朋舎、一九八四年）。
- (22) 劉表麾下の所謂荊州学派については唐長孺「漢末學術中心的南移与荊州学派」（『山居存稿』中華書局、二〇一一年）。
- (23) 諸葛亮集載先主遺詔敕後主曰、「……可讀『漢書』・『禮記』。閒暇歴觀諸子及『六韜』・『商君書』、益人意智。閒丞相爲寫『申』・『韓』・『管子』・『六韜』一通已畢、未送、道亡、可自更求聞達……」（『三國志』蜀書先主伝注引『諸葛亮集』）。
- (24) 余是以少誦『詩』・『論』、及長而備歴五經・四部、『史』・『漢』・諸子百家之言靡不畢覽（『三國志』魏書文帝紀注引『典論』）。
- (25) 渡邊義浩「孫呉の正統性と国山碑」（『三國志研究』第二号、二〇〇七年）、高橋康浩「呉鼓吹曲」と孫呉正統論」（『韋昭研究』）。

汲古書院、二〇一一年)。

- (26) 樊善標「韋昭《國語解》成書年代初探」(『大陸雜誌』第九二—九三卷第四期、一九九六—一九九七年)。
- (27) (夏侯)淵第三子稱、第五子榮。從孫湛爲其序曰「稱字叔權。自孺子而好合聚童兒、爲之渠帥、戲必爲軍旅戰陳之事、有違者輒嚴以鞭捶、眾莫敢逆。淵陰奇之、使讀「項羽傳」及兵書、不肯(『三國志』魏書夏侯淵傳注引「世語」)。
- (28) 初、權謂蒙及蔣欽曰、「卿今並當塗掌事、宜學問以自開益。……孤豈欲卿治經爲博士邪。但當令涉獵見往事耳。卿言多務孰若孤、孤少時歷詩·書·禮記·左傳·國語、惟不讀易。至統事以來、省三史·諸家兵書、自以爲大有所益。如卿二人、意性朗悟、學必得之、寧當不爲乎。宜急讀孫子·六韜·左傳·國語及三史」。……蒙始就學、篤志不倦、其所覽見、舊儒不勝。……(魯)肅拊蒙背曰、「吾謂大弟但有武略耳。至於今者、學識英博、非復吳下阿蒙」(『三國志』吳書呂蒙傳注引「江表傳」)。
- (29) 留贊……好讀兵書及三史、每覽古良將戰攻之勢、輒對書獨歎……(『三國志』吳書孫峻傳注引「吳書」)。
- (30) 是歲、立(孫)登爲太子、選置師傅、銓簡秀士、以爲賓友、於是諸葛恪·張休·顧譚·陳表等以選入、侍講詩書、出從騎射。權欲登讀「漢書」、習知近代之事、以張昭有師法、重煩勞之、乃令休從昭受讀、還以授登(『三國志』吳書孫登傳)。
- (31) (王)平生長戎旅、手不能書、其所識不過十字。而口授作書、皆有意理。使人讀史·漢諸紀傳聽之、備知其大義、往往論說不失其指(『三國志』蜀書王平傳)。
- (32) 福原啓郎「西晉における國子学の創立に関する考察」(『魏晉政治社会史研究』京都大学学術出版会、二〇一二年)。
- (33) 觀夫二漢求賢、率先經術。近世取人、多由文史(『梁書』任昉傳姚察論)。
- (34) 大同中、學者多涉獵文史、不爲章句(『陳書』沈洙列傳)。
- (35) 士大夫學問、稽博古今而罷、何用專經爲老博士也(『魏書』李瑒列傳)。

- (36) 俗間儒士、不涉羣書、經緯之外、義疏而已。吾初入鄴、與博陵崔文彥交遊、嘗說『王粲集』中雖鄭玄『尚書』事。崔轉爲諸儒道之、始將發口、懸見排蹙、云、「文集只有詩賦銘誄、豈當論經書事乎。且先儒之中、未聞有王粲也」。崔笑而退、竟不以粲集示之。魏收之在議曹、與諸博士議宗廟事、引據『漢書』、博士笑曰、「未聞『漢書』得證經術」。收便忿怒、都不復言、取韋玄成傳、擲之而起。博士一夜共披尋之、達明、乃來謝曰、「不謂玄成如此學也」(『顏氏家訓』勉學篇)。
- (37) 諸名士共至洛水戲。還、樂令問王夷甫曰「今日戲樂乎」。王曰「裴僕射善談名理、混混有雅致。張茂先論『史』·『漢』、靡靡可聽。我與王安豐說延陵·子房、亦超超玄著」(『世說新語』上卷上言語篇)。
- (38) 建興中、(王隱)過江、丞相軍諮祭酒涿郡祖納雅相知重。納好博弈、(王隱)每諫止之。……隱曰「……當今晉未有書、天下大亂、舊事蕩滅、非凡才所能立。……應仲遠作『風俗通』、崔子真作『政論』、蔡伯喈作『勸學篇』、史游作『急就章』、猶行於世、便爲沒而不朽。當其同時、人豈少哉。而了無聞、皆由無所述作也。故君子疾沒世而無聞、『易』稱自強不息、況國史明乎得失之跡、何必博弈而後忘憂哉」。……(『晉書』王隱傳)。
- (39) 石勒不知書、使人讀『漢書』。聞酈食其勸立六國後、刻印將授之、大驚曰「此法當失、云何得遂有天下」。至留侯諫、乃曰「賴有此耳」(『世說新語』中卷上識鑑篇)。
- (40) (陸)倕少勤學、善屬文。於宅內起兩間茅屋、杜絕往來、晝夜讀書、如此者數載。所讀一遍、必誦於口。嘗借人『漢書』、失五行志四卷、乃暗寫還之、略無遺脫(『梁書』陸倕傳)。
- (41) 自荒亂已來、諸見俘虜。雖百世小人、知讀『論語』『孝經』者、尚爲人師。雖千載冠冕、不曉書記者、莫不耕田養馬(『顏氏家訓』勉學篇)。
- (42) 井上進『中國出版文化史——書物世界と知の風景——』(名古屋大學出版會、二〇〇二年)。

- (43) (謝) 舉兄子僑字國美。父玄大、仕梁侍中。僑素質、嘗一朝無食、其子啓欲以班史質錢、答曰、「寧餓死、豈可以此充食乎」。太清元年卒(『南史』謝弘微列伝付孝兄子僑列伝)。
- (44) 東莞賊逢世、年二十餘、欲讀班固『漢書』、苦假借不久、乃就姊夫劉緩乞丐客刺書翰紙末、手寫一本、軍府服其志尚、卒以『漢書』聞(『顏氏家訓』勉學篇)。
- (45) 今人云、借書、還書等爲一癡(唐・段成式『酉陽雜俎』統集卷四)。
- (46) 唯『史記』・『漢書』、師法相傳、並有解釋。『三國志』及范曄『後漢』、雖有音注、既近世之作、並讀之可知(『隋書』經籍志史部正史類)。
- (47) 渡邊義浩「史」の自立(『三國政權の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年)。
- (48) 秦景通、常州晉陵人也。與弟暉尤精『漢書』、當時習『漢書』者皆宗師之。常稱景通爲大秦君、暉爲小秦君。若不經其兄弟指授、則謂之「不經師匠、無足採也」。景通、貞觀中累遷太子洗馬、兼崇賢館學士。爲漢書學者。又有劉納言、亦爲當時宗匠(『旧唐書』儒学伝上・秦景通伝)。
- (49) 『漢書』、「田冑賀上」。江南本皆作「冑」字。沛國劉顯、博覽經籍、偏精班漢、梁代謂之漢聖。顯子臻、不墜家業。讀班史、呼爲田冑、梁元帝嘗問之、答曰、「此無義可求、但臣家舊本、以雌黃改「冑」爲「冑」。元帝無以難之(『顏氏家訓』書證篇)。岳麓書院藏秦簡(參)には「冑」に読み替えるべき「冑」字(第三二七簡正)がみえ、ともかく「冑」字は戦国時代以来存在したとわかる。
- (50) 梁時明『漢書』有劉顯・韋稜。陳時有姚察。隋代有包愷・蕭該、並爲明家(『隋書』經籍志經籍二史)。
- (51) 始自漢末、迄乎陳世、爲其注解者、凡二十五家、至於專門受業、與五經相亞(劉知幾『史通』古今正史類)。

(52) 其班氏之書、成於後漢。彪既後遷而述、所以條流更明、是兼采衆賢、羣理畢備、故其旨富、其詞文、是以近代諸儒共行鑽仰。

其訓詁蓋亦多門、蔡謨『集解』之時、已有二十四家之說。所以於文無所滯、於理無所遺（司馬貞『史記索隱』後序）。

(53) 王光照「『漢』聖劉臻与隋代『漢書』学」（『江淮論壇』一九九八年第一期）。

〔付記〕 本稿は、研究報告「『漢書』学研究——以顏師古之前為中心——」第二届中国古文獻与伝統文化国際學術研討会（二〇一一年一〇月一五日、於北京師範大学京師大厦）に大幅な改稿を加えたもので、公益財団法人サントリー文化財団人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成（研究課題「貴族と士大夫」、研究代表者・柿沼陽平、二〇一三年八月～二〇一四年七月）のグループ研究の成果の一部である。

【付表】顔師古注以前の『漢書』関連書籍

番号	書名	撰者名	詳細
1	漢書旧注	—	<p>応劭『風俗通義』や『玉函山房輯佚書續編』正史類に佚文あり。撰者・成書年代不明。応劭（後漢末の人）以前に成立。服虔・応劭注前の注は顔師古叙例にないが、応劭『集解漢書』の書名をみる限り、応劭前にすでに複数の注があった（洪頤煊『読書叢録』巻19）。陳直『漢書新証』（天津人民出版社、1979年）の自序は、応劭『風俗通義』引漢書旧注を延篤注（下記）と推測するが、応劭前に複数の注があった以上、別書の可能性もある。</p>
2	漢書音義？	延篤	<p>唐・司馬貞史記索隱後序「然古今爲注解者絶省、音義亦希。始後漢延篤乃有音義一卷、又別有章隱五卷、不記作者何人、近代鮮有二家之本」によれば、後漢・延篤は史記音義を撰した。だが陳直『漢書新証』自序「漢書最早之注解、當始於東漢桓帝時之延篤、自司馬貞索隱後序、謂延篤有史記音義一卷、近世鮮有其本。今漢書天文志記昭帝始元中「流星下燕萬載宮極東去」。李奇注「延篤謂之堂前楯也」。疑延篤所注、在史記音義之外別有漢書音義」は李奇注引延篤注を『漢書』に付された音義とする。また延篤注を引く鄧展・李奇・韋昭はみな晋代前の人で、延篤注は西晋末の永嘉の乱で滅びたとする。事績は後漢書延篤伝に「篤、字叔堅。南陽犇人。桓帝時以博士徵拜議郎、與朱穆・邊韶共著作東觀、後遭黨事禁錮、永康元年（前167年）卒。…篤論解經傳、多所駁正、後儒服虔等以爲折中。所著詩・論・銘・書・應訊・表・教令、凡二十篇云」とある。なお順帝・沖帝・質帝・桓帝に仕え、桓帝擁立の功で吉成侯となった宦官州輔の「吉成侯州輔碑」（『隸積』巻17）は、延篤を含む「郷人・姻族」によって建てられたことが知られる。一方、李晨軒「延篤作《漢書音義》質疑」（『河北自學考試』2007年第6期）は延篤注の典拠がどれも不明なことから、陳直説を否定し、最古の漢書注を応劭・服虔注とする。既述のごとく、応劭注前にも諸注はあったが、たしかに延篤漢書音義の存否はまだ検討の余地もある。また陳直『漢書新証』は「延篤注＝漢書旧注（前掲欄参照）」と推測するが、かりに延篤注が存在したとしても、両者は別書の可能性もある。ここではとりあえず両者を分けておく。</p>

番号	書名	撰者名	詳細
3	—	胡広?	<p>応劭注や如淳注に「胡公曰…」とある。『漢官解詁』撰者胡広の注で、著名人ゆえに「胡公」とよばれたのであろう(洪頤煊『読書叢録』巻19)。胡公の事績は『後漢書』胡公伝参照。尚書僕射・済陰太守を歴任。顔師古注「如淳曰「胡公曰…」」によれば、魏・如淳も胡注を参照。現に、慧琳『一切経音義』巻22「各若干微塵」注「漢書胡廣曰若順也」も胡広注に作る。これが『漢官解詁』の注か、別途『漢書』に付されたものかは疑問(一般には前者の可能性が高いとされる)。</p>
4	漢書許注義	許慎	<p>王鳴盛『十七史商榷』巻7「許慎注漢書」は許慎による漢書注とみる。佚文は『玉函山房輯佚書續編』正史類等所収で、呉鼎の王仁俊が各条に「後案…」と付注。だが本注については、全て『説文解字』か『淮南子』注の引用で、『漢書』注ではないとの指摘がある(吉川, 409p)。</p>
5	漢書音訓	服虔	<p>服虔字子慎、滎陽人。後漢尚書侍郎、高平令、九江太守。…漢書舊無注解、唯服虔・應劭等各爲音義。自別施行(叙例)。服虔注・応劭注は本来各々単行本(叙例)。『後漢書』儒林伝「服虔字子慎、初名重、又名祇、後改爲虔、河南滎陽人也。少以清苦建志、入太學受業。有雅才、善著文論、作春秋左氏傳解、行之至今。又以左傳駁何休之所駁漢事六十條。舉孝廉、稍遷。中平末、拜九江太守。免、遭亂行客、病卒。所著賦・碑・誄・書記・連珠・九憤、凡十餘篇」によれば服虔は太学で学び、靈帝中平末(184-189年頃)に九江太守となった。儒林伝中に服虔漢書注の存在はみえないが、「以左傳駁何休之所駁漢事六十條」の一文に注目される。叙例配列によれば応劭注前に成立。経籍志・旧唐書・新唐書・通志は服虔注を「漢書音訓」1巻とする。洪頤煊『読書叢録』巻19は『漢書音義』の誤とする。服虔はもと服重・服祇で、最終的に服虔を名乗ったが、現存注は「服虔」に作るので、晩年に付されたか。</p>
6	漢書後序・漢事	応奉	<p>応奉は『漢書後序』を撰し、『史記』『漢書』『東觀漢記』を要約した漢初以後360余年の事に関する『漢事』17巻も撰した(『後漢書』応奉伝李賢注引袁山松『後漢書』)。応奉は武陵太守を歴任。両書は厳密には『漢書』注でない。</p>
7	漢紀	荀悦	<p>荀悦は『漢書』を要約して『漢紀』を撰した。荀悦は黄門侍郎・秘書監・侍中を歴任。叙例は荀悦を漢書注釈者と同列に挙げるが、厳密には『漢書』注でない。</p>

番号	書名	撰者名	詳細
8	集解漢書	応劭	應劭字仲瑗、汝南南頓人。後漢蕭令、御史營令、泰山太守(叙例)。凡所著述百三十六篇、又集解漢書、皆傳于時(『後漢書』応劭伝)。経籍志「漢書一百一十五卷漢護軍班固撰太山太守應劭集解(経籍志)」は蔡謨本の誤(清・姚振宗『隋書経籍志考証』巻11史部1)。経籍志・旧唐書・新唐書「漢書集解音義二十四卷應劭撰」は臣瓚注の誤(臣瓚覽参照)。
9	—	伏儼	伏儼、字景宏、琅邪人(叙例)。書名不詳。蔡邕の言を引く点と、叙例配列から判断するに、後漢末の作。
10	音義?	劉徳	劉徳、北海人(叙例)。書名不詳。叙例配列によれば、劉徳は後漢末の人。清・阮元『経籍纂詁』巻83去聲「復」条引「釋文引韓詩又廣雅釋詁一又漢書敘傳上集注引劉德音義引韋昭(注)」に「復猶遠也」とあり、劉徳注は「劉德音義」とよばれ、韋昭注を引く。すると劉徳は孫呉・韋昭注以後の成書となる。一例のみで真偽不明。
11	—	鄭氏	鄭氏、晉灼音義序云不知其名、而臣瓚集解輒云鄭徳。既無所據。今依晉灼但稱鄭氏耳(叙例)。晉灼注・臣瓚注所引で、各々「鄭氏」・「鄭徳」に作る(叙例)。晉灼集注に「北海人」とする(宋・高似孫『史略』巻2)。劉宋・裴駟『史記集解』や唐・司馬貞『史記索隱』も「鄭徳」に作る。張晏注・孟康注所引なので後漢末～魏初の作。なお当時、鄭氏は一般に鄭玄(127～200年)をさし、鄭玄は『漢書』に関わりの深い馬融や応劭とも交流がある。汴本史記索隱も鄭氏を「鄭玄」に作るが、洪頤煊『読書叢録』巻19「高帝紀沛公還軍亢父。鄭氏曰屬任城郡。郡國志任城國。不名爲郡。王子侯表斯裴戴侯道。鄭氏曰斯裴音即非。在肥鄉縣南五里。肥鄉縣、黃初二年(221年)置。皆在鄭康成(=鄭玄)後。汴本索隱以鄭氏作鄭玄誤」によると鄭玄の可能性はない。
12	—	李斐	李斐、不詳所出郡縣(叙例)。晉灼注は李斐注を引き、李斐注は蔡邕の言を引く。この点と叙例配列をふまえると、本注は後漢末～魏初作か。
13	世要論	桓範	曹魏・桓範は『漢書』を抄出・吟味して『世要論』を撰した。彼は正始の変(249年)で処刑されたので、本書は248年以前に成立。『漢書』中の諸雑事をまとめ、分析を加えたもので(『三国志』魏書曹爽伝注「範嘗抄撮漢書中諸雜事、自以意斟酌之、名曰世要論」、嚴密には『漢書』注でない。清・侯康『補三國藝文志』巻4「桓範世要論二十卷」注「『御覽』兵部二四・人事部九十八・學部五・刑法部二・資産部十四・十六俱引之、或稱『要集』或稱『論』或稱『世論』皆一書也」によれば、『太平御覽』所引「要集」「論」「世論」も本書をさす。

番号	書名	撰者名	詳細
14	—	李奇	李奇、南陽人(叙例)。晉灼注所引。叙例配列もふまえると、本注は後漢末～魏初作か。『後漢書』蔡邕列伝下「河内郡吏李奇」の李奇か。『顔氏家訓』勉学篇所引なので梁代まで存したが、経籍志未収なので隋前に散佚か。南朝梁・元帝の焚書により散佚か。
15	—	劉展?	叙例に「鄧展、南陽人。魏(漢之誤)建安中爲奮威將軍、封高樂郷侯」とあり、『三国志』魏書文帝紀裴注引『典論』に曹丕が鄧展に剣術で勝利したとあることから、鄧展は魏人。盧弼集解「鄧展事見武紀。建安十八年注所云奮威將軍樂郷侯劉展、即鄧展也」は鄧展=劉展とする。唐・徐堅『初学記』卷9帝王部注「魏文帝『典論』自叙曰、余幼學擊劍、與平虜將軍劉勳・奮威劉展等共飲酒。宿聞展有手臂、能空手入白刃…」によれば、盧弼のいうとおり鄧展=劉展で、むしろ鄧展は劉展の誤か。
16	—	文穎	文穎字叔良、南陽人。後漢末荊州從事、魏(漢之誤)建安中爲甘陵府丞(叙例)。荊州滞在中に王粲と交流(王曉慶「文穎《漢書注》考証」(『求索』2009年第1期))。叙例は「甘陵府丞」とするが、漢代に府丞官はないので「甘陵丞」の誤(齊召南考証)。水経卷5「又東北過黎陽縣南」注「昔南陽文叔良以建安中爲甘陵丞…」も「甘陵丞」に作り、齊説が妥当。
17	音義?	張揖	張揖字稚讓、清河人、魏太和中爲博士(叙例)。魏の作。叙例余靖注「止解司馬相如傳一卷」によれば司馬相如伝注で、漢書全体の注ではない。『顔氏家訓』勉学篇「學『漢書』者、悅應・蘇而略蒼・雅。不知書音是其枝葉、小學乃宗系。至見服虔・張揖音義則貴之、得通俗、廣雅而不屑」によれば、梁代に服虔注とともに重視された「音義」。書名は「音義」か。張揖は『広雅』・『古今字詁』も撰した。宋・高似孫『史略』卷2は「司馬相如一傳最難注。予嘗注此傳、大費工力」とする。張揖が司馬相如伝にのみ付注したのも、その難解さが原因であろう。
18	漢書音義	蘇林	蘇林字孝友、陳留外黄人、魏給事中領祕書監、散騎常侍、永安衛尉、太中大夫。黄初中、遷博士、封安成郷侯(叙例)。事績は『三国志』魏書高堂隆伝、同書劉劭伝注引『魏略』参照。よって魏の作。『三国志』蜀書李嚴伝裴注「蘇林漢書音義曰…」によれば書名は「漢書音義」。梁代に重視された(張揖欄引『顔氏家訓』勉学篇)。経籍志未収なので隋前に散佚か。南朝梁・元帝の焚書により散佚か。
19	漢書學官	—	唐・釈玄応『一切経音義』卷14第5卷「聚落」注に「『漢書學官』「聚曰序、郷曰庠」。張晏曰「邑落名也」…」とあり、張晏前の漢書注か。あるいは漢官儀等と同類か。

番号	書名	撰者名	詳細
20	—	張晏	張晏、字子博、中山人（叙例）。叙例配列によれば、魏の作。
21	論前漢事・漢書音	諸葛亮	諸葛亮（181-234）。顔注未取。経籍志に「論前漢事一卷蜀丞相諸葛亮撰」、新唐書に「諸葛亮論前漢事一卷又音一卷」、通志に「漢書音一卷諸葛亮」、「論前漢事一卷諸葛亮撰」。書名をみると前漢の故事に関する書のように、漢書注とは限らない。だが経籍志二史正史に他の漢書注と列記され、漢書注の可能性も低くない。新唐書・通志によれば「音一卷」もある。宋・高似孫『史略』卷2漢書音義「諸葛亮音」と同一であろう。清・佚名『唐書藝文志注』卷一（清藕香榭鈔本）「諸葛亮論前漢事一卷又音一卷」注に「隋志論前漢事一卷蜀丞相諸葛亮撰。今存光武論一篇」とある。梁・蕭繹『金樓子』卷4立言篇下の諸葛亮による光武帝論のことか。すると諸葛亮の論前漢事と漢書音は別物で、前者は評論、後者は漢書音義の類で、経籍志は両者を混同して二史正史に配した可能性もある。
22	—	如淳	如淳、馮翊人、魏陳郡丞（叙例）。北宋・陳彭年等『広韻』第244小韻如条所引の晉・荀勗『中經部』に「魏有陳郡丞馮翊如淳、注漢書」とある点、晉灼注所引である点、そして叙例配列を勘案すると魏の作。
23	漢書音義？	孟康	孟康、字公休、安平人。黄初中、以於郭后有外屬、并受九親賜拜、遂轉爲散騎侍郎…正始中、出爲弘農、領典農校尉。…嘉平末、徙勃海太守、徵入爲中書令、後轉爲監（『三国志』魏書杜恕伝裴注引『魏略』）。魏の作。経籍志に「梁有漢書孟康音九卷亡」、旧唐書に「漢書音義九卷孟康撰」、新唐書に「孟廣漢書音義九卷」、通志に「漢書音義九卷孟康」とあり、書名は「音義」か「音」。経籍志「漢疏四卷。梁有孟康音九卷。劉孝標注漢書一百四十卷。陸澄注漢書一百二卷。梁元帝注漢書一百一十五卷並亡」によれば、南朝梁に孟康注を含む4注を合わせた『漢疏』があり、「並亡」とあるので、南朝梁・元帝の焚書で散佚か。
24	漢書叙伝	項昭	項昭、不詳何郡縣人（叙例）。項昭は晉諱（司馬昭）を避けて項岱にも作る（姚振宗）。西晉代に改名か。経籍志に「漢書敘傳五卷項岱撰」、旧唐書に「漢書敘傳五卷項岱撰」、新唐書に「項岱漢書敘傳八卷」、通志に「漢書敘傳五卷項岱撰」。叙例配列によれば魏の作。『統漢書』祭祀志注所引項威漢書注の「威」は「岱」の訛で、項昭注佚文ともいわれる（章宗源）。旧唐書配列では孟康前。新唐書配列で「項岱漢書敘傳」は陰景倫の後だが誤。ここでは叙例配列に従う。

番号	書名	撰者名	詳細
25	漢書音義	韋昭	韋昭(204?-273?)。字弘嗣、吳郡雲陽人。吳朝尚書郎、太史令、中書郎、博士祭酒、中書僕射、封高陵亭侯(叙例)。『三国志』呉書韋曜伝に本伝あり。経籍志・旧唐書・新唐書・通志に韋昭『漢書音義』七卷あり。日本国見在書目録所収佚名『漢書音義三卷』は韋昭本か(詳攷)。李步嘉『韋昭《漢書音義》輯佚』(武漢大学出版社、1990年)に輯本あり。
26	三史略	張温	経籍志に「三史略二十九卷呉太子太傅張温撰」。旧唐書・通志等に「三史要略三十卷張温撰」に作る。唐代以前の「三史」は概して史記・漢書・東觀漢紀をさすので、漢書の要約も含む。厳密には漢書注でないが、たんなる要約が書庫に保管されたとは考えにくく、張温注も付されていたか。
27	漢書鈔	葛洪	葛洪(283?-343?)、晋の人。散騎常侍に召されたが就任せず、抱朴子と号して神仙道に努めた。『抱朴子』自叙篇に「又抄五經七史百家之言、兵事方伎短雜奇要三百一十卷」とあり、漢書鈔は該七史の一(詳攷)。新唐書・通志に葛洪『漢書鈔』30卷所収。本書は鈔本で注釈ではない。だが現物がなく、書中に葛洪注が皆無だったとも断言できない(現存『漢書』鈔本にはしばしば書込みがある)。
28	漢書集注 (音義or音)	晉灼	晉灼、河南人、晉尚書郎(叙例)。経籍志に「漢書集注十三卷晉灼撰」、旧唐書に「漢書集注十四卷晉灼注」、新唐書に「晉灼漢書集注十四卷又音義十七卷」、通志に「漢書集注十三卷晉灼撰」。「爰有晉灼、集爲一部、凡十四卷、又頗以意增益、時辯前人當否、號曰漢書集注。屬永嘉喪亂、金行播遷、此書雖存、不至江左。是以爰自東晉迄于梁・陳、南方學者皆弗之見(叙例)」によれば、『漢書』の本文を増益し、先人の是非を論じたもの。構成は1部14巻で、南方に伝わらず。ただし劉宋・裴駟『史記集解』は臣瓚注を積極的に引用し(史記集解序)、臣瓚注には晉灼注が引かれているので、晉灼注は実際には臣瓚注を通じて南朝にも伝わっていた(吉川忠夫「裴駟の『史記集解』」(『加賀博士退官記念中国文史哲学論文集』講談社、1979)参照)。晉灼注は服虔・応劭・伏儼・劉徳・鄭氏・李斐・李奇・鄧展・文穎・張揖・蘇林・張晏・如淳・孟康・項昭・韋昭の注を引く(王鳴盛『十七史商榷』巻7)。晉灼注は西晉作。永嘉の乱(311)前の作(叙例)。旧唐書・新唐書配列では韋昭の前。新唐書によれば音義17巻もあった。宋・高似孫『史略』巻2も「晉灼漢書集注十三卷」と「晉灼音七卷」を別々に所収。一部の敦煌文書漢書抄本を晉灼本とする説がある(前稿で諸説紹介)。

番号	書名	撰者名	詳細
29	漢書駁義	劉寶	劉寶字道眞、高平人。晉中書郎、河内太守、御史中丞、太子中庶子、吏部郎、安北將軍（敘例）。經籍志に「漢書駁義二卷晉安北將軍劉寶撰」、旧唐書に「漢書駁義二卷劉寶撰」、新唐書に「劉寶漢書駁議二卷」、通志に「漢書駁義二卷晉安北將軍劉寶撰」。新唐書配列では陰景倫らの後だが誤。『漢書纂』のみ「秦寶撰」に作るが誤。旧唐書のみ「漢書駁義」に作るが「漢書駁義」の誤であろう。宋・高似孫『史略』卷2劉寶条注に「晉中書郎・御史中丞・安北將軍侍皇太子講漢書。別有駁議」とあり、東晉の皇太子に『漢書』を講義したともある。
30	—	王楙	叙例にはみえないが、漢書高帝紀師古注に「臣瓚・王楙或云…」、景帝紀師古注に「臣瓚曰王楙云…」とある。よって王楙注は臣瓚注より前。洪頤煊『読書叢録』卷19「王楙」条は「王楙是西晉以前人。叙例亦不載」とし、漢書注とみているようである。
31	漢書集解音義	臣瓚	有臣瓚者、莫知氏族、考其時代、亦在江左。亦在晋初、又總集諸家音義、稍以己之所見、續廁其末。舉駁前說、喜引竹書、自謂顯明、非無差爽、凡二十四卷、分爲兩帙。今之『集解音義』則是其書、而後人見者不知臣瓚所作、乃謂之應劭等『集解』。王氏『七志』・阮氏『七録』、並題云然、斯不審耳。學者又斟酌瓚姓、附著安施、或云傅族、既無明文、未足取信（敘例）。經籍志・旧唐書・新唐書・通志所収「應劭漢書集解音義二十四卷」は臣瓚注の誤（姚振宗）。敘例配列によれば郭璞注の前、劉寶の後。臣瓚注所引竹書（汲冢竹書）は279～281年の発見なので（中華書局本晉書武帝紀校勘記）、臣瓚注はそれ以後の作。劉宋・裴駟『史記集解』は積極的に臣瓚注を活用しており（史記集解序）、南朝でも流布したとわかる。蔡謨は臣瓚注を解体して夾注としており（叙例）、臣瓚本は本来注の単行本だったとみられる。書名は「漢書集解音義」以外に「漢書集注」説がある（水經注所引薛瓚『漢書集注』）。臣瓚注は晉灼注（服虔・応劭・伏儼・劉徳・鄭氏・李斐・李奇・鄧展・文穎・張揖・蘇林・張晏・如淳・孟康・項昭・韋昭の注を引く）や劉寶注を引く（王鳴盛『十七史商榷』卷7）。臣瓚の実名には、姓不明（叙例、景祐余靖校本、裴駟『史記集解』序、韋稜『漢書續訓』）とする以外に、従来4説ある。①薛瓚（酈道元『水經注』、胡適『注『漢書』的薛瓚』（『胡適全集』2003））、②傅瓚（師古所引或説、宋祁注、司馬貞『史記索隱』、『文選』李善注、宋・高似孫『史略』卷2、劉宝和「『漢書音義』作者「臣瓚」姓氏考」（『文献（北京図書館）』1989-2））、③于瓚（劉孝標『類苑』、姚察『漢書訓纂』、劉昭『統漢志注補』、杜佑『通典』）、④裴瓚（朱希祖「臣瓚姓氏考」（『朱希祖先生文集』2、九思出版、1979年）。加えて⑤として、慧琳『一切経音義』「呂瓚注漢書云驥起也」の呂瓚の可能性もある。呂瓚は漢碑「鄒季宣碑陰」所見の「處士呂瓚」か。『太平御覽』卷302兵部殿条「史記絳侯世家曰…」の注にも「如淳注…呂瓚云…」とある。以上5説のどれが妥当かは現在確定しがたい。

番号	書名	撰者名	詳細
32	—	郭璞	郭璞字景純、河東人。晉贈弘農太守(叙例)。「止注相如傳序及游獵詩賦(叙例余靖注)」によれば『漢書』全体に対する注ではない。
33	漢書集解	蔡謨	蔡謨(281-356)。字道明、陳留考城人、東晉侍中五兵尚書、太常領祕書監、都督徐・兗・青三州諸軍事、領徐州刺史、左光祿大夫開府儀同三司、領揚州牧、侍中司徒不拜、贈侍中司空、謚文穆公(叙例)。謨博學、於禮儀宗廟制度多所議定。文筆論議、有集行於世。總應劭以來注班固漢書者、爲之集解(『晉書』蔡謨列伝)。叙例「蔡謨全取臣瓚一部散入『漢書』、自此以來始有注本。但意浮功淺、不加隱括、屬輯乖舛、錯亂實多、或乃離析本文、隔其辭句、穿鑿妄起。職此之由、與未注之前大不同矣。謨亦有兩三處錯意、然於學者竟無弘益」によると、本書は応劭以降の注釈を収集・検討した集注挾注本で、誤が多く、蔡謨自身の注は2,3箇所しかない。だが吉川(326p)は蔡謨以降約150年間(～陸澄)注釈がなく、蔡謨本は一応標準テキストとなったとする。経籍志所収「『漢書』一百十五卷。漢護軍班固撰、太山太守應劭集解」は蔡謨本の誤(姚振宗)。徐建委「蔡謨『漢書音義』考索」(『古籍整理研究學刊』第6期、2003年)は『史記集解』引『漢書音義』を蔡謨本とする。一部の敦煌文書漢書抄本を蔡謨本とする説がある(前稿で諸説紹介)。
34	漢書外伝	謝沈	謝沈、字は行思もしくは靜思。会稽山陰の人。晉康帝の時に著作郎となり『晉書』30余卷撰。『後漢書』100卷・録2卷・『後漢書外伝』20卷も撰し、『八家後漢書』に佚文あり。晉書卷82謝沈列伝「(謝)沈先著後漢書百卷及毛詩・漢書外傳、所著述及詩賦文論皆行於世」によれば『漢書外伝』も撰した。本書が厳密な意味で『漢書』の注かは疑問。
35	漢書注	陸澄	北齊・陸澄(424-493)。『史記』・『漢書』の異同を論じる。経籍志・通志に「漢書注一卷齊金紫光祿大夫陸澄撰」、旧唐書に「漢書新注一卷陸澄撰」、新唐書に「陸澄漢書新注一卷」。梁『漢疏』に「陸澄注漢書一百二卷」所収(孟康欄)。隋代に散佚か(章宗源)。新唐書配列では陰景倫らの後だが誤。なお宋・高似孫『史略』卷2は陸澄漢書注と陸澄漢書新注を別々に所収。『史通』卷5補注編「次有好事之者、思廣異聞、而才短力微、不能自達、庶憑驥尾、千里絕群、遂乃掇眾史之異辭、補前書之所闕。若裴松之『三國志』、陸澄・劉昭『兩漢書』、劉彤『晉紀』、劉孝標『世説』之類是也。…陸澄所注班史、多引司馬遷之書、若此缺一言、彼增半句、皆採摘成注、標爲異説、有昏耳目、難爲披覽」によると、陸澄漢書注は大部分が『史記』の引用で、史漢の異同を収集したにすぎない。同じく異聞収集を図ったとされる『後漢書』劉昭注に関しては小林岳『後漢書劉昭注李賢注の研究』(汲古書院、2013年)があり、参考になる。

番号	書名	撰者名	詳細
36	孔氏漢書音義抄	孔文詳	旧唐書に「孔氏漢書音義抄二卷孔文詳撰」、新唐書に「孔氏漢書音義鈔二卷孔文詳」。孔文詳（或作孔文祥・孔文祥）は経歴不明。旧唐書配列によれば陸澄後・韋稜前の作。佚文は唐の『史記索隱』・『史記正義』等に散見。
37	漢書音	劉顛	劉顛（481-543）。全二卷。経籍志に「漢書音二卷梁尋陽太守劉顛撰」、通志に「漢書音二卷梁尋陽太守劉顛」。「劉顛博覽經籍、偏精班漢、梁代謂之漢聖（『顔氏家訓』書證篇）」によれば、劉顛は「漢聖」と別称。宋・高似孫『史略』卷2に「劉顛音二卷。宋潯陽太守」に作る。なお劉顛の子の劉臻は、南朝梁の元帝政権崩壊後、後梁に、のち北周に仕えた漢書学者である。陳の使者として北周の長安を訪れた姚察と漢書について議論し、劉臻が「疑事十餘條」を質問し、姚察がそれらに回答した（『南史』卷69）。
38	漢書音	夏侯詠	経籍志に「漢書音二卷夏侯詠撰」、旧唐書に「漢書音二卷夏侯詠撰」、新唐書に「夏侯詠漢書音二卷」とある。経籍志に「夏侯詠」、旧唐書・新唐書・通志に「夏侯詠」に作る。『顔氏家訓』書證篇に「謝昉・夏侯詠並讀數千卷書、皆疑是譙周」、『顔氏家訓集解』引趙曦明注「案『隋書經籍志』漢書音二卷、夏侯詠撰。作詠爲是。『家訓集解』所引的劉盼遂説詠爲詠之形誤、『切韻序敦煌本』云夏侯詠韻略。『今本廣韻』亦誤作詠」によれば、夏侯詠・夏侯詠・夏侯詠は同一人物で、夏侯詠が正しい。彼は数千巻を読破した読書人として知られる。経籍志「四聲韻略十三卷、夏侯詠撰」によれば『四聲韻略』も撰した。旧唐書配列では韋稜・姚察・劉嗣の後。ここでは経籍志配列に従う。
39	漢書續訓	韋稜	『梁書』韋稜伝に「漢書續訓三卷」、経籍志に「漢書續訓三卷梁平北諮議參軍韋稜撰」、旧唐書に「漢書續訓二卷韋稜撰」、新唐書に「韋稜漢書續訓二卷」、通志に「漢書續訓三卷梁平北諮議參軍韋稜撰」。錢大昕『隋書考異』に「平北」原作「北平」、據『廿二史攷異』改。按、韋稜見『梁書』韋叡傳。傳中沒有記載韋稜歷此官職。但其父韋叡曾任平北將軍、則他的這項官職應是「平北諮議參軍」である。韋稜の父韋叡は万石君・陸賈を慕う漢代主義者で、休日には子に學問を教えた。「經史」に明るいと評判の韋稜も父から学び、韋叡の「發擿（発見・指摘の意）」は韋稜も及ばなかった（『梁書』卷12）。両者は「經史」に関する討論を授業を行なったとみられ、韋氏は代々『漢書』の師だったと思われる。ただし韋叡は京兆杜陵の人で、「自漢丞相賢以後、世爲三輔著姓」とされ、孫呉・韋昭とは無関係。韋稜は劉顛と面識があり、前者が後者に知識提供した可能性の他に（吉川、332p）、その逆の可能性もある。新唐書配列によれば陰景倫らの後だが誤。

番号	書名	撰者名	詳細
40	漢書音義？ (音)	崔浩	崔浩 (?450)。字伯深、清河人。後魏侍中特進撫軍大將軍、左光祿大夫・司徒、封東郡公(叙例)。北魏太武帝期の漢族士大夫で「廢仏毀釈」を支持した。新唐書に「崔浩漢書音義二卷」。通志に「漢書音義二卷崔浩」宋・高似孫『史略』卷2「崔浩、字伯深、清河人。後魏侍中撫軍大將軍、封東郡公。撰『漢紀音義』。景祐校本作「伯淵」」や叙例余靖注「撰荀悅漢紀音義」によると、崔浩は『漢紀音義』を撰した。すると本書は嚴密には『漢書』注ではない。だが『史略』卷2には「崔浩音一卷」ともあり、漢紀音義・崔浩音・崔浩漢書音義の關係は疑問。漢紀音義と漢書音義が別物の可能性も完全には否定できない。
41	—	劉孝標	劉孝標 (462-521) は世説注・類苑注の撰者(『梁書』文学下庾仲容列伝・太祖五王列伝)。南朝梁『漢疏』所収四注の一で「劉孝標注漢書一百四十卷」とあり、唐初すでに散佚(経籍志)。南朝梁・元帝の焚書によるか。『漢疏』の排列によれば劉孝標注は陸澄注前。
42	—	崔慰祖	『南齊書』文学列伝によれば、明帝時に国子祭酒沈約・吏部郎謝朓達が吏部の役所に集い、崔慰祖に漢書地理志の不明の箇所十余事を質問した。崔慰祖は吃音だったが、回答の根拠は精確で、同席した面々は賞めちぎった。謝朓は「たとえ班固・司馬遷が生き返ったとしても、これ以上にはいくまい」と感心したという。謝朓が司馬遷・班固以上と評している以上、漢書地理志に関する問答をした際には相当数の異聞を交えたのであろう。同伝後半部に「臨卒、與從弟緯書云「常欲更注遷・固二史、採史漢所(泥)〔漏〕二百餘事、在廚籠。可檢寫之、以存大意」とある。これによると崔慰祖は亡くなる直前、從弟の崔緯に遺言した。漢書注を付すつもりで保管しておいた遺漏 200 余事があるので、私の死後に検討・書写して大意を存せよ、と。これは未刊の漢書注ともみなせる。崔慰祖が長生きした場合に世に出ていたはずの漢書注という意味で、とりあえずここに載せる。
43	—	蕭繹	蕭繹は南朝梁・元帝 (508-554)。元帝『金樓子』著書篇に「注前漢書十二帙、一百一十五卷」、『梁書』元帝本紀に「注漢書一百一十五卷」、『南史』元帝本紀に「注漢書一百一十五卷」、経籍志に「梁元帝注漢書一百一十五卷亡」。梁・蕭繹『金樓子』著書篇にも同内容あり。家臣に『漢書音』の撰者劉瓛がおり、元帝はつねに劉瓛説に賛同したらしいので(『顔氏家訓』書證篇)、元帝注は劉瓛『漢書音』から影響を受けたか。南朝梁『漢疏』4巻所収で、唐初以前に散佚。梁滅亡時に元帝の焚書で焼失か。

番号	書名	撰者名	詳細
44	—	江子一	「江子一、字元貞、濟陽考城人、晉散騎常侍統之七世孫也。父法成、天監中奉朝請。及侯景反…見害。……子一續『黃圖』及班固九品、並辭賦文筆數十篇、行於世（『梁書』卷43）」によれば、梁・江子一は『三輔黃圖』・『漢書』古今人表を「續」した。「續」の字義は不明だが、恐らく古今人表に補遺を付したのではないか。
45	漢書抄？	袁峻	「袁峻、字孝高、陳郡陽夏人、魏郎中令渙之八世孫也。峻早孤、篤志好學、家貧無書、每從人假借、必皆抄寫、自課日五十紙、紙數不登、則不休息。…除員外散騎侍郎、直文德學士省、抄『史記』『漢書』各爲二十卷。又奉敕與陸倕各製新闕銘、辭多不載（『梁書』卷49）」によれば、袁峻は若い時貧乏で、周囲から書籍を借りて抄写し勉強した。書写材料は紙で、のち『漢書』20巻の鈔本を作った。本書も紙に書かれたのであろう。経籍志等に未収で、現物もなく、詳細は不明。だが鈔本中に書込みが皆無とは断言できない。
46	漢書訓纂	姚察	姚察(522-606)。呉興武康(浙江省)の人。子の姚思廉と『梁書』・『陳書』を撰。『漢書訓纂』については陳書や南史の姚察伝にみえる他、経籍志に「漢書訓纂三十巻陳吏部尚書姚察撰」、旧唐書に「漢書訓纂三十巻姚察撰」、新唐書に「姚察漢書訓纂三十巻」、通志に「漢書訓纂三十巻陳吏部尚書姚察撰」、日本国見在書目録に「漢書訓纂三十巻陳吏部尚書姚察撰」。司馬貞『史記索隱』等に佚文あり、地理書を多く引用(吉川, 366-384p)。宋・高似孫『史略』巻2に「姚察漢書定疑卷二」に作る。『史記正義』・『太平寰宇記』河南道等に佚文あり。経籍志・通志に「漢書集解一卷姚察撰」・「定漢書疑二巻姚察撰」。『定漢書疑』は、陳・大建年間(569-582)初期に劉瓛が「漢書疑事十餘条」を姚察に質問した時(『陳書』姚察伝)の問答記録か(吉川, 333p)。なお姚察の漢書学は子の姚簡(字思廉)へ伝承され(新唐書巻102)、北周時代の弟子に弘農の楊汪がいた(隋書巻56)。新唐書配列では陰景倫らの後だが誤。日本西宮武居氏藏『漢書』楊雄伝抄の欄外に藤原良秀による書込があり(948年)、姚察『漢書訓纂』や顧胤『漢書古今集義』も引く。
47	漢書集解		
48	定漢書疑		
49	漢書音義	劉嗣ら	旧唐書に「漢書音義二十六巻劉嗣等撰」、新唐書に「劉嗣等漢書音義二十六巻」とある。撰者は複数。旧唐書配列によれば姚察注の後、夏侯詠の前。新唐書配列によれば夏侯詠の前。唐代以前の人なので、本注も唐代以前。宋・高似孫『史略』巻2漢書音義に「劉嗣音一卷」とある。
50	—	宋均？	『漢書』巻26天文志の師古注所引。『漢書』全体でなく天文志の注か。

番号	書名	撰者名	詳細
51	漢書音義 (漢書音?)	蕭該	蕭該は南蘭陵の人で、開皇初、隋國子博士(『隋書』卷75儒林伝、『北史』卷82儒林伝下)。梁・鄱陽王恢の孫。北周時代の弟子に楡林の閻毗(閻立德・閻立本の父)がいる(隋書卷68)。隋・開皇年間には陸法言『切韻』編纂事業に顔之推・劉臻らと参画(廣韻序)。これより蕭該は、同時代の著名な漢書学者(顔之推・劉臻など)と交流し、文字・音韻に詳しい人物だったと推定される。経籍志に「漢書音義十二卷國子博士蕭該撰」、旧唐書に「漢書音二卷夏侯詒撰又十二卷包愷撰又十二卷蕭該撰」。『隋書』儒林伝に「該後撰『漢書』及『文選』音義、咸爲當時所貴」。新唐書に「蕭該漢書音十二卷」、宋・高似孫『史略』卷2漢書音義に「蕭該音義十二卷」、『宋史』藝文志一・經類小学類に「蕭該漢書音義三卷」とある。本来12巻で、元代までに4分の3が散佚か。通志に「漢書音義十二卷國子博士蕭該」と「漢書音十二卷蕭該」の両方所見。彼は南朝陳・太建年間(569-582)初期に、姚察と『漢書』について討論(姚察欄)。旧・新唐書配列によれば配列では包愷の後。『倭名類聚抄』等に佚文。清・臧輔が佚文収集をして輯本3巻を撰。
52	漢書音	包愷ら	隋文帝の長子楊勇(?-604)が包愷等に撰させた。経籍志に「漢書音十二卷廢太子勇命包愷等撰」、日本国見在書目録に「漢書音十二卷隋廢太子勇(勇の誤)令包愷等撰」、旧唐書に「漢書音二卷夏侯詒撰又十二卷包愷撰」、新唐書に「包愷漢書音十二卷」、通志に「漢書音十二卷廢太子勇命包愷等」。王仲通の弟子(『隋書』儒林・包愷伝)。楊勇は600年に廃嫡されたので、包愷注は600年以前成立。なお隋煬帝期に包愷は縦山におり、李密が弟子入して『漢書』を学んだ(新唐書李密伝)。旧・新唐書配列によれば蕭該の前。『隋書』卷75儒林伝「東海包愷、字和樂。其兄愉、明五經。愷悉傳其業。又從王仲通受史記・漢書、尤稱精究。大業中、爲國子助教、于時漢書學者、以蕭・包二人爲宗匠。聚徒教授、著録者數千人。卒、門人爲起墳立碣焉」(『北史』卷82儒林伝下に類文)。清・趙宏恩『(乾隆)江南通志』卷190藝文志「史漢音義東海包愷」は「史漢音義」に作る。司馬貞『史記索隱』等に包愷注の佚文がみられる。
53	前漢音義	張沖	隋書儒林列伝に「吳郡張沖、字叔玄。仕陳爲左中郎將。將非其好也。乃覃思經典、撰『春秋義略』異於杜氏七十餘事・『喪服義』三卷・『孝經義』三卷・『論語義』十卷・『前漢書義』十二卷、官至漢王侍讀」とあり、ほぼ同文が『冊府元龜』卷606にもみえる。『前漢音義』以外に『春秋義略』等を撰。『隋書』儒林列伝の配列で張沖は蕭該・包愷の後なので、張沖注は蕭該注・包愷注以後に成立か。

番号	書名	撰者名	詳細
54	漢書刊繁	于仲文	于仲文は隋臣で、煬帝の遼東遠征時に死亡。『隋書』于仲文列伝に「撰漢書刊繁三十卷」。『北史』巻23も参照。姚薇元『北朝胡姓考』（科学出版社、1958）によると于仲文は本来「萬忸于」姓で、北魏以来の鮮卑系の臣らしい。
55	漢書決疑	顔游秦	旧唐書に「漢書決疑十二卷顔延年撰」とあるが、中華書局本校勘記に「本書巻七三顔師古傳、「叔父游秦撰『漢書決疑』十二卷、爲學者所稱。後師古注『漢書』、亦多取其義耳」。可證此書爲游秦所撰」、新唐書に「顔游秦漢書決疑十二卷」とあり、顔游秦撰の誤。新唐書配列では陰景倫らの後だが誤。
56	漢書集義	顔胤	宋・高似孫『史略』巻2漢書雜伝に「顔胤漢書集義二十卷」。
57	—	顔師古	顔師古。貞観15年(641)完成。姪の顔昭甫との関係にも注目される(顔氏家廟碑・顔魯公集)。宋書に「班固漢書一百卷顔師古注」、
補	漢書故事	—	慧琳『一切經音義』に「漢書故事云」とある。「漢書故事」の語は他にもみえるが、『太平御覽』巻809火齊条や武英殿本史記巻12史記正義所引『漢書故事』は宋本御覽や百衲本史記等だと「漢武故事」に作り、民国景宋本『白氏六帖事類集』巻12所引『漢書故事』は他書だと「郎官故事」や「郎將故事」に作り、誤文の可能性がある。
補	漢書別伝	—	宋・倪思『班馬異同』所引で、撰者・成書年代不明。だが『史記』『漢書』に同文がみえ、漢書注か疑問。
補	前漢考異	—	『通志』巻65に「前漢考異」、宋・高似孫『史略』巻2漢書注に「前漢考異一卷失姓氏」、宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「前漢考異」とある。明・錢希言『劍菴』に佚文。撰者・年代・内容は不明だが、『通志』所収である以上、宋代以前の作。
補	漢書句字	—	宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「漢書句字」とある。撰者・年代・内容は不明だが、蕭該漢書音義と三劉漢書の間に位置するので、唐宋時代の書か。
補	漢書講解	—	宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「漢書講解」とある。撰者・年代・内容は不明だが、漢書問答と律曆辨疑・劉氏兩漢刊誤の間に位置するので、唐宋時代の書か。
補	律曆志音	陰景倫	通志に「漢書律曆志音義一卷陰景倫撰」。宋・高似孫『史略』巻2漢書音義に「陰景倫律曆志音一卷」とある。撰者・年代・内容は不明。
補	律曆辨疑	—	宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「律曆辨疑」とある。撰者・年代・内容は不明だが、漢書講解と劉氏兩漢刊誤の間に位置するので、唐宋時代の書か。

番号	書名	撰者名	詳細
補	集校兩漢書	—	宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「集校兩漢書」とある。撰者・年代・内容は不明だが、唐書新例須知と劉知幾史通の間に挙げられ、唐代の書か。
補	班史名物編	王倬	宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「班史名物編」、宋史に「王倬班史名物編十卷」とある。年代・内容は不明。漢雋(宋・林鉞撰)と東漢年表の間に挙げられ、宋代の書か。
補	班史菁華	—	宋・尤袤『遂初堂書目』史学類に「班史菁華」とある。撰者・年代・内容は不明だが、兩漢法語と班左誨蒙の間に挙げられ、唐代の書であろう。
補	漢書旧隱義	—	通志卷65に「漢書舊隱義一卷舉三使者禮部問科目百餘条」。撰者・年代・内容は不明。

※本表は顔師古以前の『漢書』関連注などをあつめたものである。「補」以下は前稿執筆時点で未発見だった唐宋期『漢書』関連書籍。各書籍の詳細欄には書籍・撰者の詳細をしるし、適宜関連書籍も引用した。姚振宗は『隋書經籍志考証』(『二十五史補編』所収)、章宗源は『隋書經籍志考証』。詳攷は輿膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(汲古書院、一九九五年)の略。